

【暗証聖句】

「これに対して、霊の結ぶ実は・・・寛容です」ガラテヤの信徒への手紙 5 章 22 節

【日・忍耐の神】

人生は思い通りに行かないことの連続かもしれません。それゆえ、人は神にすがりますが、神様を信じればすべてが順調にいくのかと言えば、そうとも限りません。むしろ、忍耐を学ばされることも多いのです。ローマ 15 章 4 節に、「かつて書かれた事柄は、すべてわたしたちを教え導くためのものです。それでわたしたちは、聖書から忍耐と慰めを学んで希望を持ち続けることができます」と書かれています。聖書にはたくさんの信仰者たちが登場しますが、彼らの人生を学ぶと、それは忍耐の連続であったことがわかります。しかし、その忍耐の先に、やがて主の慰めが必ず訪れることに気づかされるのです。そして、私たちはそこに希望を見出すのです。

詩編 27 編 14 節に「主を待ち望め。雄々しくあれ、心を強くせよ。主を待ち望め」と教えています。また、詩編 37 編 7 節では「沈黙して主に向かい、主を待ち焦がれよ」とあります。私たちが信じている神様は、忍耐と慰めの源(ローマ 15 章 5 節)なのです。私たちが主の助けを待ち望みながら忍耐し続けていくとき、不思議な希望が生まれてきます。これは忍耐の中で信仰が養われ、その信仰が希望を生み出すからです。そして、この一連の出来事の中に、神様の愛があることを知るのであるのです。パウロは次のように言います。

ローマ 5 章 3～5 節「そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。」

【月・神の時に】

ローマ 5 章 6 節に「実にキリストは、わたしたちがまだ弱かったころ、定められた時に、不信心な者のために死んでくださった」と書かれています。イエス様は適当な時に地上に来られたわけではなく、この地上に来られるときも、また十字架にかかって死なれるときも、定められていました。ガラテヤ 4 章 4 節では、「しかし、時が満ちると、神は、その御子を女から、しかも律法の下に生まれた者としてお遣わしになりました」と、この定められた時がカウントされており、ついにその時が満ちたと表現されています。しかし、アダムが罪を犯してから 4000 年近くが経過していました。なぜ、これほど長い時を待つ必要があったのでしょうか。また、なぜこの時でなければならなかったのでしょうか。それは誰にも分かりません。ダニエル書 9 章 24～27 節にかけて、70 週の預言と呼ばれるイエス様が地上に来られ、十字架で死なれる時が正確に預言されていますが、それはバビロンに捕囚とされたイスラエルがエルサレムへの帰還命令(BC457 年)が出てから 490 年も先のことでした。この預言の言葉を受けた時代の人は、誰一人生きてはいません。神様は様々な時をあらかじめ定めておられますが、その時が満ちるまで、私たちは忍耐して待つこととなります。神様が定められた時は、最も良い時であることは理解していても、それが試練や困難からの解放の時であれば、なぜ神様の助けをこれほど長く待たなければならぬかと思ってしまうこともあるでしょう。神様のご計画の中には、私たちが主を待つということも含まれているのです。そのことを通して神様は私たちの信仰を育て、成長させようとお考えなのです。問題が解決することよりも、信仰が成長することの方が重要だからです。主を信頼して待ち続けるうちに、問題がもう問題ではなくなってしまうことも少なくありません。それは信仰が強くなり、その問題を乗り越えてしまうからです。

【火・ダビデ…待つことの実物教訓】

ダビデがまだ王になる前のこと、サウル王に執拗に命を狙われました。そのためダビデは追手から逃げなければならぬようになりました。そのような中で、ダビデがサウルの命を奪えるチャンスが訪れるのですが、ダビデはサウルに手をかけることはありませんでした。ダビデは部下のアビシャイにこう言います。「殺してはならない。主が油を注がれた方に手をかければ、罰を受けずには済まない」。自分の命を狙っているとはいえ、また良い王とは言えないサウルであったとしても、油を注いで王としたのは主なる神である。そのような主が油を注がれた方に手をかければ、罰を受けずには済まないだろうというのが、サウルを生かしておく理由でした。しかし、ダビデをこう続けるのです。

サムエル記上 26 章 10 節「主は生きておられる。主がサウルを打たれるだろう。時が来て死ぬか、戦に出て殺されるかだ。」ダビデは、主が自分を王として選んでくださっていることを理解していました。だとすれば、自ら王の命を奪うようなことをしなくても、時がくればいずれサウルは失脚するだろうと信じていたのです。ここにダビデの信仰があります。神様が定められたことは、人間の側の努力や功績に関わらず、必ずなるのです。箴言 19:21 に次のように書かれています。

「人の心には多くの計らいがある。主の御旨のみが実現する」箴言 19:21

ダビデは、深い眠りに陥っていた王の枕もとにあったやりと水差しを取って引き返していきます。あとからこの事実を知ったサウルは、自分は殺されていてもおかしくなかった。神様に守られているダビデに勝つことは不可能だと悟り、帰っていくの

でした。もし、サウルの命を奪っていたとしたらどうなっていたでしょうか。同族同士、醜い争いが永遠と続くことになったかもしれません。ヤコブがエサウの祝福を奪ってしまったことを思い出します。神様はヤコブを祝福すると言われていたのに、そのときが来るのを待てず、自ら父の祝福をエサウから奪ってしまったのです。その結果、エサウの激しい恨みを買ひ、家から出ていかなければならなくなったのです。ダビデは沈黙し、主に委ねたわけですが、これが正解でした。

【水・エリヤ…性急さの問題】

孤高の預言者と言われるエリヤは、たった一人でバアルの偽預言者 450 人、そしてアシラの偽預言者 400 人とカルメル山で戦い、生きのまま火の場所に乗って天に上げられた偉大な人物です。ところが、カルメル山での霊的な戦いの後、アハブ王の妻イゼベルから命が狙われるはめになり、エリヤは恐れて逃げだすのです。そして、「主よ、もう十分です。わたしの命を取ってください。わたしは先祖にまさる者ではありません」と弱音を吐くのです。あの恐れを知らないかのようなエリヤが、なぜこれほど弱くなってしまったのか不思議です。カルメル山での戦いで、燃え尽きてしまったのかもしれませんが。極度の緊張と興奮の中で過ごしたわけですから、エリヤには休息が必要だったのです。それなのに休む間もなく、命が狙われることになり、冷静に考えることも難しい状況だったと考えられます。そんなエリヤに主は、「弱音を吐くな」とか、「強い信仰を持って」とは言われませんでした。主がエリヤにお与えになったのは、何と眠りと食事でありました。

列王記上 19 章 5～7 節「彼はえにしだの木の下で横になって眠ってしまった。御使いが彼に触れて言った。「起きて食べよ。」見ると、枕もとに焼き石で焼いたパン菓子と水の入った瓶があったので、エリヤはそのパン菓子を食べて、水を飲んで、また横になった。主の御使いはもう一度戻って来てエリヤに触れ、「起きて食べよ。この旅は長く、あなたには耐え難いからだ」と言った。

エリヤは神様ではありません。弱い肉体と心をもった人間なのです。神様はそのことをよくご存じです。だから、まずエネルギーを取り戻させたのです。その後、四十日四十夜歩かせ、神の山ホレブに導かれ、そこで細い御声の中から語りかけられたのです。ところで、この間イゼベルはどこにいたのでしょうか。追手はどこにいったのでしょうか。彼らはエリヤを探し続けていたことでしょうか。しかし、どこを探しても見つかりません。神様が隠してくださったのでしょうか。水曜日のテーマは、「性急さの問題」となっていますが、次から次へと問題が襲い掛かり、焦ってしまうのは無理もないことです。偉大な預言者として同様です。そのようなとき神様は、私たちを周囲のことから解放し、ゆっくりと休むようにと導かれるのです。

【木・主を喜ぶことを知る】

良好な人間関係を築けるときは幸せです。しかし、その関係が何らかの理由で一瞬にして壊れてしまうことがあります。あるいは、招かれざる客のように、意地の悪い人が突然私たちの前に現れるかもしれません。その途端に、人生が難しいものとなってしまいます。しかし、他人の影響によって、たった一度の人生が辛いものになるというのは、何と勿体ないことでしょうか。聖書は詩篇 37:1 で、「悪事を謀る者のことでいら立つな。不正を行う者をうらやむな。」と教えています。これは、他の人を気にせず、自分の歩むべき道を行けということでしょうか。しかし、それができれば苦勞しないのです。悪影響を与える人から離れるというのは、一つの解決方法かもしれませんが、聖書が教える解決方法は、問題そのものではなく、主に向かって沈黙せよ、そこに救いがあるということでした。詩編 37 編 4 節には次のように書かれてあります。

「主に自らをゆだねよ。主はあなたの心の願いをかなえてくださる。」

人間関係を自分の力で解決しようと試みるのではなく、まず主に委ねることです。主は必ず願いをかなえてくださいます。そのことを先取りして、主を喜ぶことこそ信仰なのです。